第一章　匂宮の物語　匂宮、大内記から薫と浮舟の関係を聞き知る

［第一段　匂宮、浮舟を追想し、中君を恨む］

*宮、なほ、かのほのかなりし夕べを思し忘るる世なし（兵部卿宮は今も尚、あの仄かに見た新人をお忘れになることがありません）。「ことことしきほどにはあるまじげなりしを（物置に居た女だから、身分の高い家柄の者では有り得ないが）、人柄のまめやかにをかしうもありしかな（すれていないで、人柄がまじめで可愛らしかったな）」と、いとあだなる御心は（ととても気の多い御気性には）、「口惜しくてやみにしこと（惜しいところで抱き損ねた）」と、ねたう思さるるままに（ともの欲しく思われなさるままに）、*女君をも（二条院夫人の御方にも）、　*「宮」は注に＜匂宮。二条院で浮舟をちらった見たことをさす。＞とある。文意からして確かにそうらしいが、是が作者の原稿では巻頭文ではなかったとしても（実際、この書き出しは珍しいほどに、前巻の東屋巻末との繋がりが内容にしても語り口にしても違和感がない）、上文とは別の話題転換をして話を始める時に、また他に多くの宮も登場している中で、「宮」とだけしか言わない神経には本当に隔世感を覚える。此処でこの人を「兵部卿宮」と呼称してどんな支障なり違和感が有るのか、私には全く分からない。　*「女君」は＜夫人＞くらいの言い方に聞こえるが、匂宮の正妻は源氏の六姫だから、是はこの二条院を舞台にした際の女主人という意味なのだろう。

「*かう（こんな女房相手の）、はかなきことゆゑ（ちょっとした気晴らしなのに）、*あながちに（頑なに女の素性を明かさずに）、*かかる筋のもの憎みしたまひけり（ヤキモチを焼きなさるとはねえ）。*思はずに心憂し（そこまで細かいとは、意外で面倒だ）」　*「かうはかなきこと」は＜主人が女房相手に戯れること＞を＜こんな他愛も無いこと＞と言う価値観や生活感が、いかにも身分制度社会の差別意識を示していて興味深い。戯れと言っても男女関係なのだから、妻は地位が脅かされる危険があるわけで、女房との主従関係を形態としても精神的にも保つことが難しいという大変な重圧を掛けられることにはなるだろう。しかし、そういう男の身勝手は、帝の高貴な胤に象徴される価値観から、有能な人物に与えられた徳として世間から認められていて、そういう男に女が擦り寄る事も文化醸成機能として認識されて、そういう設備を組み込んだ社会制度が町造りや家造りの様式にまで構築されていて、現にそういう形で多くの富の再配分とは即ち流通経済の発展が起こる、という人間社会の生理作用に基づいているので不滅であり、当然に今日でも日常事情だ。が、人間の生理作用は他にも多々あって、それらとの総合的な整合性を取るのが難しいというのも、また永遠の宿題ではありそうだ。ともあれ、大変な重圧に妻が耐える頼りは実家の権勢だとはこの物語で何度も示されているが、是も今日に変わらない事情だ。女主人の地位は、絶対的な夫の権勢であろう帝の地位を以てしても、その夫の一存だけでは左右できない一大政治問題で、その夫の重圧を和らげる為に女房相手の女遊びが許されているという面もあるのかもしれない。とすれば、男も女も悲しいが、だからこそ楽しいとも言えそうだ。起伏の大きさこそが感情の大きさだろうから、安穏とした生活は退屈だ。が、私は無能で怠惰な人間なので安穏とした暮らしの方を望む。　*「あながち」は、頑として常陸姫の素性を明かさない御方の態度、を言っているのだろう。それが、匂宮の多情を責める御方の態度に見えたらしい。　*「かかる筋のもの憎み」は＜男女関係の妬み＝嫉妬＞という言い方のようだが、匂宮も御方がヤキモチを焼いて拗ねているのではなく、見かけた女が御方の縁者らしく、何か訳が有りそうだとは気付いていて、女が可愛かったことと相俟って興味を引かれてはいるのだろう。だから、その訳を聞き出そうと、わざと挑発的にこういう言い方をした、という場面で、その芝居がかった語調で「したまひけり」を言い換える。　*「思はず」は＜意外な失望感＞で、何が「意外」かと言えば＜あまりに細かいことに拘る煩わしさ＞なのだろう。

と、恥づかしめ怨みきこえたまふ折々は(と見下して不平を仰る時々には)、いと苦しうて(とても辛いので)、「ありのままにや聞こえてまし(ありのままにお話し申そうか)」と思せど(とお思いになるが)、

「やむごとなきさまにはもてなし*たまはざなれど(正室にはお迎えなされないだろうが)、浅はかならぬ方に(浅い縁ではない人と)、心とどめて人の隠し置きたまへる人を(心に思い留めて薫大将が宇治山荘に隠し置いていらっしゃる義妹を)、物言ひさがなく聞こえ出でたらむにも(軽々しくお知らせ申してしまっても)、さて聞き過ぐしたまふべき御心ざまにもあらざめり(それで納得して身を引きなさる宮様の御性分とは思えない)。　*「たまはざなれど」は「たまはざらむなれど」の短縮だろう。

さぶらふ人の中にも(相手が女房であってさえ)、はかなうものをものたまひ触れむと思し立ちぬる限りは(興味を引かれて抱いてみようと思い立ちなさったら)、*あるまじき里まで尋ねさせたまふ御さまよからぬ御本性なるに(親王の身であってはならない臣下身分の里家までお通いなさるという御行儀の悪い御多情ぶりなので)、*さばかり月日を経て(もう数ヶ月と経た今も)、思ししむめるあたりは(常陸姫をお忘れでない執心ぶりからして)、ましてかならず*見苦しきこと取り出でたまひてむ(宇治にまで押し掛けなさり、女房相手以上に必ず面倒なことを起こしなさるだろう)。他より伝へ聞きたまはむはいかがはせむ(義妹の居所を、宮様が他から聞き知りなさったらどうしよう)。　*「あるまじき」は注に＜親王という身分柄あってはならない、女房ふぜいの実家まで尋ねていく匂宮の性分。＞とある。　*「さばかり月日を経て」は注に＜『完訳』は「匂宮が浮舟に迫ったのは八月。三、四か月後の今も忘れられない」と注す。「あたり」は浮舟をさす。＞とある。今が晩冬の年末近くだということは後文から知れるようだが、巻頭書き出しには今の時候が何も語られていない。やはり脱稿は疑わしい。「宮」の書き出しの唐突さは、現代の読者である私だから覚える違和感だ、とはとても思えない。　*「見苦しきこと取り出でたまひてむ」は注に＜『集成』は「薫との間に悶着が起るだろう、の意」と注す。＞とある。従うが、「あるまじき里まで尋ねさせたまふ」と語られる文脈からは＜宇治に押し掛ける＞と補語する。

いづ方ざまにもいとほしくこそはありとも(誰の立場からしても波風が立ちそうだが)、防ぐべき人の御心ありさまならねば(それを面白がる人なので、抑え込める宮様の御性分では無いから)、よその人よりは聞きにくくなどばかりぞおぼゆべき(他人の女房相手の場合よりは厭な話ばかりを聞くことになりそうだ)。とてもかくても(とにかく)、わがおこたりにてはもてそこなはじ(私から洩らすような失敗はしないで置こう)」

と思ひ返したまひつつ(と思い直しては)、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず(複雑な気持ながら知らせ申しなさらず)、異ざまにつきづきしくは(嘘を尤もらしくは)、え言ひなしたまはねば(言い繕えなされないので)、おしこめてもの怨じしたる(黙り通して夫に不満を持つ)、世の常の人になりてぞおはしける(普通の妻を演じていらっしゃいました)。

[第二段　薫、浮舟を宇治に放置]

*かの人は(かと思えば当の薫大将は)、たとしへなくのどかに思しおきてて(全く呑気に考えておいでで)、「待ち遠なりと思ふらむ(私の訪問を待ち侘びているかしら)」と(と姫を宇治に隠し

置いているのを)、心苦しうのみ思ひやりたまひながら(心苦しいとばかりに思い遣りなさりながら)、所狭き身のほどを(大将という窮屈な地位に居る立場からして)、さるべきついでなくて(それなりの理由も無しに)、かやしく通ひたまふべき道ならねば(容易くお通いになれない宇治への遠路なので)、*神のいさむるよりもわりなし(神が禁じた道ではないというのに出掛けられません)。*されど(しかも大将は)、　*「かの人」は薫大将のことらしい。「かの」は＜その当の＞という言い方なのだろう。　*「神のいさむる」は注に＜『源氏釈』は「恋しくは来てもみよかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに」（伊勢物語）を指摘。＞とある。ということは、この「神のいさむる」は＜神が禁じた道ではないのだから＞という言い方。なので、この「よりも」は＜(禁じられた道)より以上に＞という語用ではなく、「より」は依拠を示す格助詞の＜という言われ＞で、「も」は逆接の＜なのに＞、という言い方。で、「わりなし」は「さるべきついでなくて」を受けて＜出掛けられない＞。　*「されど」は＜しかし＞と逆接する接続詞だが、下文の文意は上文にある放置に＜反して＞善処するということではなく、上文で放置が懸念されている現状である＜にも関わらず＞今後も放置を続けるという論旨上の否定意を示しているので、上文の懸念に対しては＜しかし＞という逆接ではなくて、下文に於いても更に懸念が重なる＜しかも＞と被せる語用だ。

「*今いとよくもてなさむ、とす(その内にしっかり処遇する、ことにすれば良いだろう)。*山里の慰めと思ひおきてし心あるを(常陸姫は宇治山荘で故姉君を懐かしむ人形にと考えていた心算なので)、*すこし日数も経ぬべきことども作り出でて(それなりにまとまった日数が必要な用事を宇治に作って)、のどやかに行きても見む(ゆっくり出かけた時にでも会うことにしよう)。さて(そのままあの人は)、しばしは人の知るまじき住み所して(しばらく誰にも知られないように隠し住まわせて)、やうやう*さる方に(次第に宇治暮らしに)、かの心をも*のどめおき(あの人も馴染んで)、わがためにも、人のもどきあるまじく(私にとっても誰からも非難されないように)、なのめにてこそよからめ(目立たなくするのが良いだろう)。　*「今」は、此処では＜直ぐ＞ではなく＜その内に＞と間を置く言い方らしい。こういう語用は現代語でもあるが、分かり難いのは話し運びというか、「されど」の地文に続いてこの「今」から薫殿の内心文になるという語り口ないし語り手の呼吸・間合いで、非常に文意が掴み難い。校訂でこのように内心文括弧が施されていても、私には分かり難い言い回しに聞こえる。まして、「とす」の語用も見慣れない。この「とす」は＜と今は決める＝として置こう＞くらいの言い方かも知れないが、いっそ＜として置けば良いだろう＞とまで言い換えた方が文意が立つかと、ちょっと身勝手を通す。　*「やまざと」は＜宇治山荘＞だろうが、源大将が宇治山荘を管理する権限は本来は無い。本来の所有者は二条院の御方であり、薫殿はその御方に委任されている、という事情なのだろう。ただ、「山里の慰め」は＜宇治山荘に出掛けた時の気晴らし＞ではなく、薫殿にとっての宇治山荘は故姉君の居場所なので、この「山里の慰め」は＜故姉君を思い出す人型＞を指す。*「すこしひかずもへぬべきことども」は注に＜『完訳』は「日数のかかりそうな法会などにかこつけて浮舟を訪う心づもり」と注す。＞とある。　*「さる方」は何を指すののか。偶に男が通ってくるのを待つ身、だろうか。また、「山里の慰めと思ひおきてし」を受ければ＜宇治姫(もどき)＞にも見える。が、此処では取り敢えず「なのめにてこそよからめ」だから＜宇治暮らし(になれること)＞なのだろう。　*「のどむ」は＜落ち着く。許す。＞だから、「のどめおく」は＜すっかり落ち着く＝馴染む＞くらいだろうか。

にはかに(急に京に迎えて)、何人ぞ(誰なのか)、いつより(いつから一緒になったのか)、など聞きとがめられむも(などと聞き質されるのも)、もの騒がしく(煩わしく)、*初めの心に違ふべし(直ぐ京に迎えるのは、宇治姉君を偲ぶ初心とも違ってしまう)。また、宮の御方の聞き思さむことも(また二条院の御方が話を聞いてお思いになることにしても)、もとの所を際々しう率て離

れ(宇治を早々に離れ連れ出し)、昔を忘れ顔ならむ(故君を忘れたようになるのも)、いと本意なし(実に不本意だ)」　*「初めの心に違ふべし」は注に＜亡き大君の身代わりとして求めた心。＞とある。「もの騒がし」が「違ふ」のではなく「にはかに(京に迎えむ)」が「違ふ」ということ、らしい。

など思し静むるも(などと考えて気持を抑えるのも)、例の、のどけさ過ぎたる心からなるべし(いつもの悠長に過ぎる性格によるもののようです)。渡すべきところ思しまうけて(薫大将は姫を京に迎える家を用意しようとお考えになって)、忍びてぞ造らせたまひける(密かには造らせていらっしゃったのです)。

[第三段　薫と中君の仲]

すこしいとまなきやうにもなりたまひにたれど(大将は少し忙しくお成りだったが)、宮の御方には(二条院の御方には)、なほたゆみなく心寄せ仕うまつりたまふこと同じやうなり(今でも怠りなく親しく御世話申し上げなさること変わりません)。見たてまつる人もあやしきまで思へれど(側仕えの女房たちもその熱心さを普通の親切とは違うと思ったが)、世の中をやうやう思し知り(御方は世間のことを次第に知りなさり)、人のありさまを見聞きたまふままに(一般の人付き合いを見聞きなさると)、「これこそはまことに昔を忘れぬ心長さの(大将こそは本当に昔を忘れない誠実さが)、名残さへ浅からぬためしなめれ(いつまでも深い見本だろう)」と、あはれも少なからず(と感慨も少なからず覚えます)。

*ねびまさりたまふままに(薫大将は年を重ねなさるに従って)、人柄もおぼえも(人格も評判も)、さま殊にものしたまへば(特に優れていらっしゃるので)、宮の御心のあまり頼もしげなき時々は(御方は夫の匂宮があまり御思い遣りに欠ける時々は)、　*「ねびまさる」は＜ますます成熟する＞と古語辞典にあって、それだけで褒め言葉のようだが、此処では＜年を重ねる＞と取って置く。因みに、薫殿 27 歳、匂宮 28 歳、御方 27 歳、常陸姫 21 歳、女二の宮 16 歳。注には＜主語は薫。＞とある。確かに分かり難い。

「思はずなりける宿世かな(期待外れの結婚だった)。故姫君の思しおきてしままにもあらで(亡き姉君の考えていらっしゃった大将との結婚ではなしに)、かくもの思はしかるべき方にしもかかりそめけむよ(このように悩まされる宮様の方と結婚してしまったものだ)」

と思す折々多くなむ(とお思いになる事が多くありました)。*されど、対面したまふことは難し(しかし、大将が御方に直接対面なさることはなかなか出来ません)。　*「されど」は「なほたゆみなく心寄せ仕うまつりたまふこと同じやうなり」を受けていると思われる文意なので、此処の主語は薫大将だろう。

年月もあまり*昔を隔てゆき(年月もだいぶ宇治姉君の死後から経ち)、うちうちの*御心を深う知らぬ人は(混み入った薫殿と宇治姫との仲の事情を深く知らない女房などは)、「なほなほしきただ人こそ(一般の人なら)、さばかりのゆかり尋ねたる睦びをも忘れぬに(多少の縁があった人との交遊を忘れないのも)、つきづきしけれ(狭い世間に生きているので、普通だけれど)、なかなか(却って)、かう限りあるほどに(大将殿のような世間の広い方にあっては)、例に違ひたる(慣例に外れている)」ありさまも(と陰口される状態も)、つつましければ(敬遠されるので)、宮の絶えず思し疑ひたるも(夫宮が絶えず仲を疑いなさるのも)、いよいよ苦しう思し憚りたまひつつ(ますます心苦しく思い気が引けなさって)、おのづから疎きさまになりゆくを(御方は次第に疎

遠気味になるものの)、さりとても絶えず(それでも大将は絶えず御見舞を遣わしなさり)、同じ心の変はりたまはぬなりけり(ご縁を大事になさる同じ心がずっと変わりなくいらっしゃるのでした)。　*「昔」は故姉君と薫大将との仲というよりは、其を含めた宇治時代の事情総体みたいな言い方に見えるが、やはり核心は故姉君の事情なのだろう。姉君は今年で三回忌ではなくて三周忌を迎えたはずで、死後丸三年が過ぎている。だから、八宮が逝去してからは丸四年が過ぎている。そして、薫君が宇治へ通い出してからだと、19歳ないし20歳からだから7〜8年は経っている。時間は不思議だ。悠久の時間もあれば刹那もあって、それが存在の全てのように思えたりもする。長いようで短い、短いようで長い、とは万人の知る所だろう。気の持ちよう、意識の問題、のようで、厳然たる実体だったりする。薫殿にとっては光陰矢の如く過ぎた時間でも、三年は部外者には途方もなく長い時間だ。　*「みこころ」の「御」は薫殿に対する尊称。

宮も、あだなる御本性こそ(夫宮も浮気な御性分は)、*見まうきふしも混じれ(見るのも厭な場合も時折交じるが)、若君のいとうつくしうおよすけたまふままに(若君がとても可愛らしくご成長なさるに従って)、「他にはかかる人も出で来まじきにや(源氏殿腹にはこんな可愛い子は出来ないかもしれない)」と、やむごとなきものに思して(と、とても大事にお思いになって)、うちとけなつかしき方には(寛いで落ち着ける相手としては)、人にまさりてもてなしたまへば(二条院の御方を正室以上に親しくなさるので)、ありしよりはすこしもの思ひ静まりて過ぐしたまふ(源氏姫との御成婚当初よりは御方は安心して日々を過ごしなさいます)。　*「見まうし」は「見まく憂し」の短縮と古語辞典に説明がある。「見まく」の「見ま」は「見む(見ようとする)」の上代活用の未然形で、未然形は否定の「ず」や意志の「む」や形態の「く」などの助動詞に付く語尾変化のようで、「見まく」は＜見ようとすること＞らしい。で、「見ま憂し」は＜見るのも嫌＞。

[第四段　正月、宇治から京の中君への文]

*睦月の朔日過ぎたるころ(新年が明けて、正月の上旬過ぎに)渡りたまひて(匂宮は二条院にお越しなさって)、*若君の年まさりたまへるを(若君が一つ年齢をおとりになって2歳にお成りなのを)、もて遊びうつくしみたまふ昼つ方(遊び相手になって可愛がっていらっしゃる昼時分に)、小さき童(小さな童女が)、緑の*薄様なる*包み文の大きやかなるに(緑の薄様で手紙を大きく包んだものに)、小さき*鬚籠を小松につけたる(小さな飾り籠を松の小枝に付けたもの)、また(またそれとは別に)、すくすくしき*立文とり添へて(きちんとした形の手紙を添え持って)、*奥なく走り参る(無造作に走って参ります)。女君にたてまつれば(そして童女はその手紙を御方様にお渡し申し上げると)、宮(匂宮が)、　*「むつきのついたちすぎたるころ」は注に＜主語は匂宮。『集成』は「上旬は、朝廷、大臣家等での儀式、宴会が多い上、正室の六の君のもとで過さねばならなかったのであろう」と注す。＞とある。　*「若君の年まさりたまへる」は、宿木巻八章一段から二段に掛けて、「如月の朔日ごろに(二月の初旬に)、直物とかいふことに(追加人事という事で)、権大納言になりたまひて(薫君は権大納言に就きなさって)、右大将かけたまひつ(右大将を兼務なさいます)。右の大殿、左にておはしけるが(右大臣の源氏殿が左大将を兼務なさっていたのを)、辞したまへる所なりけり(近衛職兼務をお辞めになったことによる順送り人事なのでした)。喜びに所々ありきたまひて(薫君は就任御礼に諸侯を表敬なさって)、この宮にも参りたまへり(二条院にも参上なさいました)。　〜(中略)〜　からうして(出産は長引いたが、やっと)、その暁(次の日の明け方に)、男にて生まれたまへるを(第一子が男の子にてお生まれになったのを)、宮もいとかひありてうれしく思したり(宮もとても手応えのある存在に感じて嬉しくお思いになりました)。」と去年の記事があったので、今年で二歳だが、二月生まれなので数え年の違和感は少ない。　*「うすやう」は大辞泉に＜薄手の鳥の子紙・雁皮紙(がんぴし)。また、一般に薄手の和紙。

薄葉。＞とある。「鳥の子紙(とりのこがみ)」は＜雁皮(がんぴ)を主原料とした上質の和紙。鶏卵の色に似た淡黄色で、強く耐久性があり、墨の映りもよい。福井県・兵庫県産のものが有名で、越前鳥の子・播磨紙(はりまがみ)ともいわれる。＞とある。「雁皮」は＜ジンチョウゲ科の落葉低木。暖地に多い。高さ約 1.5 メートル。葉は卵形。夏、筒形の薄黄色の小花が集まって咲く。樹皮の繊維は紙の原料となる。《季 花＝夏》＞とある。雁皮の画像は「松江の花図鑑」サイトが詳しい。雁皮紙の紙梳き動画もユー・チューブにアップされていた。　*「つつみぶみ」は注に＜結び文をさらに薄様で包んだもの。後朝の文などに用いる。浮舟から中君への手紙。＞とある。大辞泉には＜薄様(うすよう)などを上おおいにした手紙。特に平安時代、後朝(きぬぎぬ)の手紙や懸想(けそう)文に用いた。＞とある。「結び文」は大辞泉に「結び状」として＜細く巻き畳んで、端または中ほどを折り結んだ書状。恋文や儀礼に用いられた。結び文(ぶみ)。＞とある。参照画像を探したら「京都縁結び&パワースポット」ブログに＜京都須賀神社の懸想文売り＞が紹介されていて、近似印象が楽しい。　*「鬚籠(ひげこ)」は＜竹や針金を編んで、編み残しの端を、ひげのように延ばしたかご。贈り物などを入れるのに用いた。泥鰌籠(どじょうかご)。ひげかご。＞と大辞泉にある。ユー・チューブに川越祭りのレクチャーらしき解説動画の中で「鬚籠」も語られていた。　*「たてぶみ」は包み紙の上下を折った正式な形の手紙で、注には＜右近から大輔に宛てた手紙。＞とある。が、「右近」とは誰か。常陸姫に付いて宇治に居る側近女房は侍従のはずで、侍従なら常陸姫の二条院の物忌みにも付き添っていて、御方の側近女房である大輔の君とも面識がありそうな気がするが、それでも、個人的に文通し合うほど親密だったとも思えず、側近女房の役目柄、互いに連絡しあっていたというくらいの間柄なら有り得るかと理解できて、何とか話に付いて行けそうだが、「右近」という女房に突然登場されても面食らうばかりだ。もし、是が誤注でないなら、後文で左様な明示記事でもあるとしか思えず、であるなら、此処でその事までも示してもらわないと納得のしようがない。その上で、此処でこういう記事があるとするのなら、宇治に居る常陸姫の当初の側近女房は侍従だけだったが、後から何人かが補充されるのは妥当だし、その中に「右近」という側近女房が居たという事になるが、写本ではそういう記事が脱稿している、ということにはなりそうだ。また、東屋巻四章三段に「右近とて、大輔が娘のさぶらふ来て、格子下ろしてここに寄り来なり」と「右近」という御方の若女房が登場していたが、その女房が宇治へ派遣されているということも、全く有り得ない事情ではないのかもしれないが、そういう事情説明が無いことは事実だ。いずれにしても、こういう分かり難さは嫌だし、こういう点こそ専門家に整理して置いて貰いたいと切望する。で結局、今現在(2013.11.21)の私には「右近」はあまりに唐突に過ぎるので、この手紙の差出人は「侍従」だと見做して置く。「右近」を納得できた時点で、このノートなり、言い換え文なりを書き直すことになるだろうが、それを考えると、またぞろ腹立たしい。　*「奥無し(あうなし)」は＜［形ク］思慮が浅い。軽率である。＞と大辞泉にある。

「それは、いづくよりぞ(それは何処からのものか)」

とのたまふ(と仰います)。

「宇治より大輔の*おとどにとて(宇治から大輔大姉様にということで)、*もてわづらひはべりつるを(姉様が見つからず使者が困っていましたのを)、*例の(いつものように、大輔姉様宛てと言っても実は)、御前にてぞ御覧ぜむとて(御方様が御覧になるものだろうと)、取りはべりぬる(私が受け取ってきました)」　*「おとど」は「大殿」と表記され＜大邸宅＞や＜大臣＞をいうこともある。此処では上臈に対しての童女が邸内で言う呼び名のようだから＜大姉御・大姐御＞あたりで、上品に言えば＜大姉様＞くらいか。「殿」は男を示す語ではないので、「たいふのおとど」は「大輔の大殿」とも書けそうだが、やはり紛らわしいか。　*「もてわづらひはべりつるを」は注に＜主語は使者。大輔のおとどがいなくてまごついていた。＞とある。*「例の」は注に＜「御覧ぜむ」にかかる。女童の不用意な失言。＞とある。つまり、「御覧ぜむ」は＜大輔宛てと言っ

ても実は御方が御覧になる＝御方宛のもの＞と暴露してしまった、という童女の「奥なし」ぶりだということらしい。其処まで明示補語するのは不自然だが、どうせ「奥なし」なのだからと明示する。

と言ふも（と言うのも）、いと*あわたたしきけしきにて（とても浮かれ気味の早口で）、　*「あわたたし」は＜せかせかと落着きがないさま＞だろうが、此処では童女が＜珍しい飾り物に興奮している→浮かれはしゃいでいる→早口で囃し立てる＞さまだと下文から知れる。

「この籠は（このこは、この飾り籠は）、金を作りて（かねをつくりて、金細工で）色どりたる籠なりけり（色付けしてあります）。松もいとよう似て作りたる枝ぞとよ（松も良く似せて作ってある枝ですよ）」

と、笑みて言ひ続くれば（と笑顔で言い続けるので）、宮も笑ひたまひて（宮も笑いなさって）、

「いで、我ももてはやしてむ（どれ、私も見てみよう）」

と召すを（と受け取りなさるのを）、女君、いとかたはらいたく思して（御方は、不都合が懸念されて、とてもお困りになって）、

「文は、大輔*がりやれ（手紙は大輔の所に持って行きなさい）」　*「がり」は＜「処（か）在り」の約。他の語に付くときは連濁で「がり」となる＞と古語辞典に説明があり、語用は＜その人のもとに。その人のいるところへ。＞とある。

とのたまふ（と童女に仰います）。御顔の赤みたれば（その御方の御顔に赤味が差していたので）、宮（宮は）、「大将のさりげなくしなしたる文にや（大将が表立った手紙とは別に遣した手紙のようだぞ）、宇治の名のりもつきづきし（宇治からと言うのが如何にもそれらしい）」と思し寄りて（と勘繰りなさって）、この文を取り*たまひつ（その手紙を童女から取り上げなさってしまいました）。　*「たまひつ」の「つ」は動作完了を示す助動詞だが、「たり」の傍観表現とは違って、その完了事態を注視する問題意識がある表現だ。だから、強調意もあるが、少し意外性から来る驚きもあって、不都合が懸念されるのに、事態はその懸念される方向に進んでいる、というような＜～してしまった＞くらいの言い方。

さすがに（それはないだろうが）、「それならむ時に（そうかもしれない）」と思すに（とお思いになれば）、いとまばゆければ（御方はとても面映く）、

「開けて見むよ（開けて読むよ）。怨じやしたまはむとする（嫌ですか）」

とのたまへば（と宮が仰ると）、

「見苦しう（嫌です）。何かは（どうして）、その女どちのなかに書き通はしたらむうちとけ文をば（女同士の仲で書き合っている私的な手紙を）、御覧ぜむ（見ようとなさるのでしょう）」

と*のたまふが（と仰るものの）、*騒がぬけしきなれば（騒がない様子なので、宮は淡々と）、　*「のたまふが」の「が」は単に体言の主格を示す格助詞のようでもあるが、「騒がぬけしきなれば」は「いとまばゆければ」を逆接で受けていて、「開けて見むよ～とのたまふが」は挿入句の構文なので、この「が」は直上の「のたまふ」を受

けると言うよりは、「いとまばゆければ〜のたまふ」までを受けて、下に逆接する接続助詞と取るべきもの、のように見える。　*「騒がぬけしきなれば」は「開けたまふ」に掛かるが、この「なれば」は「開けたまふ」に因果として掛かるのではなく、「騒がぬけしきなれば」は＜そのまま＞なども形容句が省かれていて、その＜そのまま＞の形容状態で「開けたまふ」という語りなのだろう。というのは、匂宮は御方が＜騒ごうと騒ぐまいと＞手紙を見たのであり、むしろ騒いだ方がより興奮したのだろうが、この場で御方が騒げるはずがない。事を大きくして傷付くのは御方だからだ。だから、御方は騒がないし、宮は淡々と手紙を読んだ、のだろう。しかし、何の形容句も明示が無い以上は私の勝手な推論なのだろう。が、今のところ私にとって他の解釈は成立しない。

「さは、見むよ(では、読もう)。女の文書きは、いかがある(女の手紙というものは、どんなものなのかな)」

とて開けたまへれば(と言って開けなさると)、いと若やかなる手にて(その手紙はとても若やいだ字で)、

「おぼつかなくて(ご無沙汰のまま)、年も暮れはべりにける(年も暮れてしまいました)。山里のいぶせさこそ(山里の閉塞感は)、峰の霞も絶え間なくて(峰の霞が晴れないもので)」

とて(とあり)、端に(最後に)、

「*これも若宮の御前に(これを若君に差し上げてください)。あやしうはべるめれど(拙いものですが)」　*「これ」は注に＜卯槌をさす。＞とある。下文の侍従からの手紙に「卯槌(うづち)」の明示がある、ようだ。「卯槌」は＜平安時代、正月初の卯の日に中務(なかつかさ)省の糸所(いとどころ)から邪気払いとして朝廷に奉った槌。桃の木を長さ3寸（約9センチ）、幅1寸四方の直方体に切ったもので、縦に穴をあけ、5色の飾り糸を5尺（約1.5メートル）ばかり垂らし、室内にかけた。＞と大辞泉にある。関連サイトは「いつきのみや歴史体験館」サイトの＜卯槌つくり＞が詳しい。

と書きたり(と書いてあります)。

[第五段　匂宮、手紙の主を浮舟と察知す]

ことにらうらうじきふしも見えねど(特に見所のある風情も感じられない手紙だが)、おぼえなき、御目立てて(誰だろうかと興味引かれ、心当たりがないのでよく目を凝らしなさって)、この立文を見たまへば(もう一通のちゃんとした手紙の方を御覧になると)、げに女の手にて(如何にも女房然とした手馴れた字で)、

「年改まりて(新年行事で)、何ごとか*さぶらふ(お忙しいことでしょう)。*御私にも(あなた御自身にも)、いかにたのしき御よろこび多くはべらむ(さぞ楽しい御慶事が多いことでしょう)。*「さぶらふ」は謙譲語で尊敬語ではないから、是は差出人の近況報告かと思ったが、下に「御私にも」とあるので、この「さぶらふ」が公務として＜お仕えする＞という女房言葉らしく見えて来た。だとしても、「何ごとか」が疑問句なら「さぶらいたまはむ」くらいは言いそうだ。だから、「何ごとか」は＜さぞどんなにか＞という副詞語用で、「さぶらふ」は＜仕事が忙しい＞という女房内の仲間符牒だろうと読んで置く。　*「おおんわたくしにも」は注に＜「私」は、主人筋に対して私的なこと。＞とある。

ここには(この宇治山荘は)、いとめでたき御住まひの*心深さを(とても恵まれたお暮らしぶりとは存じますが)、なほ(やはり姫君には)、ふさはしからず見たてまつる(相応しくないと拝し申します)。かくてのみ、つくづくと眺めさせたまふよりは(このように漫然と日々を過ごしなさるばかりよりは)、時々は*渡り参らせたまひて(時々は其方の御方様の許へ参上なされて)、御心も慰めさせたまへ(お話しなさって御心を慰めなされば良い)、と思ひはべるに(と存じますが)、*つつましく恐ろしきものに思しとりてなむ(例の一件を、姫君は避けたい恐ろしいことと思い込みなさって)、もの憂きことに嘆かせたまふめる(其方への参上も億劫に思い悲しんでいらっしゃるようです)。　*「こころふかさ」は手紙の書き手である女房の＜深い理解＞なのだろう。　*「わたりまゐる」は＜其方へ参上する＞という言い方らしい。　*「つつましく恐ろしきもの」は＜匂宮の言い寄り＞の事を言うのだろうが、今はこの手紙をその匂宮が読んでいるので＜宮の言い寄り＞は明示補語できない。

若宮の御前にとて、卯槌まゐらせたまふ(姫は若宮様へ卯槌をお作り申しなさいました)。*大き御前の御覧ぜざらむほどに(宮様のいらっしゃらない内に)、御覧ぜさせたまへ(差し上げてください)、とてなむ(とのことです)」　*「おほきおまへ」は注に＜匂宮をさしていう。＞とある。匂宮の目を避けたい、というのは、贈り物の贈り主である常陸姫が匂宮に意識されることを避けたい、という意図だろうか。であれば、つくづく童女の「奥なし」は罪深い。が、そういう言い方も童女には酷なので、つくづく間が悪い。ただ、匂宮の立場でこの文を読む限りは＜言い寄る男の目を避けて＞ではなく＜私的なものなので恥ずかしいから大人の男の目を避けて＞くらいに思うのだろう。

と、こまごまと*言忌もえしあへず(と細かい事を正月早々不吉な忌み言葉を慎みもせずに)、もの嘆かしげなるさまのかたくなしげなるも(もの悲しげに書かれている文面の見苦しく愚かしいのも)、うち返しうち返し(何度も見直して)、あやしと御覧じて(匂宮は変にお思いになって)、*「こといみもえしあへず」は注に＜『集成』は「（正月だというのに）縁起でもない言葉を慎むことも忘れて。「ふさはしからず」「つつましく恐ろしきものに」「もの憂きことに嘆かせたまふ」など」と注す。＞とある。従って補語する。

「今は、のたまへかし(もう仰ったらどうです)。誰がぞ(誰からの手紙ですか)」

とのたまへば(と仰ると)、

「*昔、かの山里にありける人の娘の(故宮に仕えていた女房の娘が)、さるやうありて(事情があって)、このころかしこにあるとなむ聞きはべりし(最近あの宇治山荘に居ると聞いて居ります)」　*「昔、かの山里にありける人」が常陸守夫人のことなら、事実とは違う。守夫人は京の八宮邸で仕えていた。宿木巻七章四段の弁尼が薫殿に守夫人を「故宮の、まだかかる山里住みもしたまはず、故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける上臈」と説明していた。が、御方の発言主旨が＜故八宮に仕えていた人＝大輔などが若くてのころ友達にてありける人(東屋巻四章一段)＝常陸殿＞という意味で、「人の娘＝常陸殿の娘」という意味が匂宮に通じたなら、詳しい事情は問題ではない、のかもしれない。

と聞こえたまへば(と御方が答えなさると)、おしなべて仕うまつるとは見えぬ*文書きを心得たまふに(包み文が普通の女房仕えをしている者とは思えない文面と匂宮はお分かりなので)、*かのわづらはしきことあるに*思し合はせつ(立て文に「つつましく恐ろしきものに思しとりてな

む、もの憂きことに嘆かせたまふめる」と何かこの二条院を敬遠する理由があるかの文面があったことから、包み文が去年の八月末に見かけた女からの手紙で、その女が御方の縁者の娘らしいと気付きなさったのでした)。　*「ふみがき」は女房の遣した「立て文」の方の文面ではなくて、「薄様の包み文」の方の文面。　*「かのわづらはしきことある」は立文の文面。　*「思し合はせつ」は包み文と立て文の文面から手紙の差出人を、去年の八月に見かけた気になる女だ、と匂宮が気付いた、ということらしい。そして、上文の御方の話からすると、その女は常陸殿の娘で、その娘が宇治山荘に居て、若君に贈り物をして来ることからすれば、常陸殿は御方の縁者らしい、とも、此処で匂宮は初めて勘付いたのだろう。もしそうなら、匂宮にとっては、御方がこの娘を特別扱いする理由の一つが解けた、ということかも知れない。

卯槌をかしう(卯槌は良く出来ていて)、つれづれなりける人のしわざと見えたり(時間のある人の仕事と見えました)。*またぶりに(小松の飾り物の二股の所に)、山橘作りて(山橘の実を作って)、貫き添へたる枝に(刺し付けてある枝に)、　*「またぶり」は＜二股になった枝。＞と古語辞典にある。先に正月の松飾りを「緑の薄様なる包み文の大きやかなるに、小さき鬚籠を小松につけたる」(四段)と語られていた、その「小松」のことらしい。で、その「小松」について童女が「この籠は金を作りて色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て作りたる枝ぞとよ」と言っていて、良く出来た細工物だったと示されている。「山橘(やまたちばな)」は大辞泉に＜ヤブコウジの別名。《季 冬》＞とあり、「藪柑子(やぶかうじ)」は＜ヤブコウジ科の常緑小低木。低い山地の林内に生え、高さ約 15 センチ。葉は長楕円形で先がとがり、質は厚くてつやがある。夏、数個の白い小花を下向きにつけ、冬に赤い実を結ぶ。鉢植えなどにし、正月の飾りに用いる。やまたちばな。あかだまのき。＞とある。確かに、今の正月の松飾りにも小さな赤い実が添えられている。で、この「山橘」が「鬚籠」で、その「鬚籠」は「金を作りて色どりたる籠」だった、ということだろうか。であれば、「色どりたる」のは＜赤＞だったことになる。

「まだ古りぬ物にはあれど、君がため深き心に待つと知らなむ」(和歌 51-01)

「若君に　幸多かれと　祝い松」(意訳 51-01)

*注に＜浮舟の詠歌。「まだ古り」に「またぶり」を響かせ、「松」「待つ」「先づ」は懸詞。「君」は若君をさす。若君の長寿と弥栄を予祝する歌。＞とある。先ず以て、「弥栄を予祝する」という注釈の語意が分からず、とは言っても漢字の意味から大凡は見当が付くが、見慣れず使い慣れない語はあやふやなので、大辞泉で読みと意味を確認すると＜いやさかをよしゅくする、ますますの繁栄を前祝いする＞と予想通りだった。が、古文だけでなく、現代語でも紛らわしい日本語、または言葉の難しさを、妙なところで再認識させられた。さて、当歌は縁起物の祝歌なので、趣きは言葉遊びの大喜利を如何工夫するか、が見所なのだろう。注に習って歌意を取ると、「まだふりぬものにはあれど」は＜このマタブリの小松はまだ長寿を示す古木ではありませんが＞で、「きみがためふかきこころに」は＜若君の長寿と繁栄を心から＞で、「まつとしらなむ」は＜先ず以て期待を知らせる松であると示しています＞くらいになりそうだ。

と、*ことなることなきを(と在り来たりの歌詠みがしてあるのを)、「かの思ひわたる人のにや(ずっと気になっていた人の歌か)」と思し寄りぬるに(とお知りになって)、御目とまりて(御目が止まって)、　*「殊なることなし」は＜大したことはない＞で、常陸姫の祝歌に付いての評価らしいが、私にはとてもよく出来た歌に見えて、何か意図がある言い方なのかとさえ思った。が、私はこの手の歌を見慣れていないので凝った印象を受けたが、掛詞の語用は確かに有り勝ちにも思えるし、小松引きの歌詠みでは有り触れたものだったのかも知れない。

「返り事したまへ(御返事をなさいな)。情けなし(せっかくの若君へのお祝いですから)。隠いたまふべき文にもあらざめるを(でも、女同士の手紙だからなどと、隠し立てなさるような手紙でもないでしょうに)。など、御けしきの悪しき(如何して機嫌が悪いのでしょう)。まかりなむよ(私は自室へ行きますから)」

とて(と言って匂宮は)、立ちたまひぬ(御方の御部屋から出て行きなさいました)。女君、*少将などして(御方は女房の少将君などに)、　*「少将などして」は注に＜「などして」は、などに向かっての意。「少将」は中君付きの女房。「宿木」「東屋」巻に登場。＞とある。

「いとほしくもありつるかな(常陸姫には間の悪い事で、宮様に居場所を知られて気の毒なことです)。幼き人の取りつらむを(童女が手紙を使者から取ったのを)、人はいかで見ざりつるぞ(誰か如何して注意しなかったのですか)」

など、忍びてのたまふ(などと小声で仰います)。

「見たまへましかば(私共が見付け申しておりましたなら)、いかでかは、参らせまし(如何して童女に手紙を運ばせ申しましょう)。すべて(何しろ)、この子は心地なうさし過ぐしてはべり(この子は考えが無さ過ぎます)。生ひ先見えて(先が思い遣られます)、人は、おほどかなるこそをかしけれ(女房にはおっとりしている方が向いています)」

など憎めば(などと少将が童女を叱ると)、

「あなかま。幼き人、な腹立てそ(まあまあ、子供に腹を立てなさいますな)」

とのたまふ(と御方は仰います)。去年の冬(こぞのふゆ、ついこの冬先に)、人の参らせたる童の(側近女房が奉公させた親戚の童女で)、顔はいとうつくしかりければ(顔立ちがとても可愛らしかったので)、宮もいとらうたくしたまふなりけり(宮様もとても可愛がっていらっしゃったのです)。

[第六段　匂宮、大内記から薫と浮舟の関係を知る]

わが御方におはしまして(匂宮は自室に戻りなさって)、

「あやしうもあるかな(意外だったな)。宇治に大将の通ひたまふことは、年ごろ絶えずと聞くなかにも(宇治に大将が通いなさることは数年来絶えないと聞く中にも)、忍びて夜泊りたまふ時もあり、と*人の言ひしを(目立たないように夜泊まりなさる事もあると近侍連中が言っていたのを)、いとあまりなる人の形見とて(さぞ故姉君を懐かしむあまりの身代わりとして)、*さるまじき所に旅寝したまふらむこと(身分柄も無くあの辺りの女を抱いていらっしゃるのだろう)、と思ひつるは(と思っていたが)、*かやうの人隠し置きたまへるなるべし(御方の縁者を隠し置いていらっしゃったのか)」　*「人」は女房ではなく近侍の郎党なのだろう。大将家と兵部卿宮家の従者仲間の噂話を匂宮が聞き及んだ、という事情だろうと踏んで置く。　*「さるまじき所」の「さるまじ」は＜あってはならない→身分不相応だ＞で、「ところ」が場所を示すなら＜宇治山荘が身分不相応だ＞ということになるが、宇治山荘は故八宮の

王家所領であり、今は御方の、延いては匂宮自身の管理物件でもあり、決して大将が泊まるに卑しい場所ではない。だから、此処での「ところ」は＜その土地の女＞という語用で、「さるまじ」は＜分不相応な卑しい女＞という意味だろう。　*「かやうの人」は常陸姫だが、匂宮はこの人を如何に「かやう」と認識していたのか。御方が何も明かさなかったので、去年の八月末に匂宮が常陸姫とあって以来、今まで宮は姫の素性を知らなかったが、今回の若宮への松祝いで、御方はついにこの姫が自分の縁者だと宮に知らせてしまった。その姫が今は宇治に居て、その宇治には薫大将が通っている。ガッテン！である。

と*思し得ることもありて（と、その大将殿の隠し女が去年見掛けた女だったかと事情が察せられなさって）、*御書のことにつけて使ひたまふ*大内記なる人の（御学問の相談に御用命なさる高位書記官の大内記の職にある人で）、*かの殿に親しきたよりあるを思し出でて（大将殿の従者に縁者の居る者の事を思い出しなさって）、御前に召す（御部屋に呼び出しなさいます）。参れり（大内記は参上しました）。　*「思し得ることもありて」の「ことも」は上文から察せられる別の事を指しているのだろう。即ち、去年の宮と姫の出会いだ。　*「御書のこと（おおんふみのこと）」は注に＜「書」は学問の意。＞とある。*「大内記（だいないき）」は大辞泉に＜律令制で、内記のうち上位の官職。だいだいき。＞とある。「内記」は＜律令制で、中務省（なかつかさしょう）に属し、詔勅・宣命の草案を作り、叙位の文書交付や記録などを扱った官職。大・中・少各２名ずつあったが、のちに中内記は廃された。うちのしるすつかさ。→外記（げき）＞とある。「外記」は＜律令制で、太政官（だいじょうかん）に属し、少納言の下にあって、内記（ないき）の草した詔勅の訂正、上奏文の起草、先例の勘考、儀式の執行などをつかさどった官職。大外記と少外記があった。＞とある。書記職ではあるのだろうが、王朝にあっては天皇の言葉は政治そのものなので、その権威の高さは圧倒的だったのだろう。　*「かの殿」は注に＜薫の邸。＞とある。「親しきたより」は懇意の縁者。

「*韻塞すべきに（韻字当てをするので）、集ども選り出でて（問題の参照に出来る漢詩集類を選び出して）、こなたなる厨子に積むべきこと（此処の棚に積んで用意せよ）」　*「韻塞（ゐんふたぎ）」は大辞泉に＜漢詩の中の韻字を隠しておいて、当てさせる文字遊び。平安時代に流行。＞とある。教養比べの趣だが、光君と藤殿との勝負では負けわざとして藤殿が光君を宴席に招いたという記事が賢木巻六章三段にあったので、熱心に勝負にこだわったらしく、それだけに高名な学識者を自陣に招いたのだろう。

などのたまはせて（などをお命じになって）、

「右大将の宇治へいますること（右大将が宇治へ出向きなさるのは）、なほ絶え果てずや（今も続いているのですか）。寺をこそ、いとかしこく造りたなれ（寺をずいぶん立派に造ったそうだが）。いかでか見るべき（どんなものか見たいものだ）」

とのたまへば（と匂宮が仰ると）、

「寺いとかしこく（寺はとても丁寧に）、いかめしく造られて（荘厳に造られていて）、*不断の三昧堂など（念仏供養の修行堂など）、いと尊くおきてられたり（とても尊く仏壇が祭られている）、となむ聞きたまふる（とのように聞いて居ります）。通ひたまふことは（大将殿の御通いは）、去年の秋ごろよりは、ありしよりも（去年の秋頃からは以前よりも）、しばしばものしたまふなり（頻繁になさっているようです）。　*「不断の三昧堂（ふだんのさんまいだう）」は＜不断経を上げる講堂＞らしい。「不断経（ふだんぎゃう）」は＜毎日、絶え間なく経を読むこと。また、死者の冥福追善などのために、一定の期間、

昼夜間断なく大般若経(だいはんにゃきょう)・最勝王経・法華経などを読みあげること。不断の読経。＞と大辞泉にある。「三昧堂」は＜僧が中にこもって、法華三昧や念仏三昧を修する堂。特に、法華経についての長講を行う堂。＞とある。

下の人びとの忍びて申ししは(下働きの者たちが内々に申しているところでは)、『女をなむ隠し据ゑさせたまへる(大将は愛人を隠し住まわせていらっしゃる)、けしうはあらず思す人なるべし(憎からず思っていらっしゃる人らしい)。あのわたりに領じたまふ所々の人(宇治近くの荘園の者たちが)、皆仰せにて参り仕うまつる(皆命じられて参上して御世話申している)。宿直にさし当てなどしつつ(宿直に差し向ける侍に)、京よりもいと忍びて、さるべきことなど問はせたまふ(京からもごく内密に必要な物資を御見舞させなさいます)。いかなる幸ひ人の(大将の御眼鏡に適った幸運な人とはいえ)、さすがに心細くてゐたまへるならむ(宇治山荘に残し置かれては、さすがに心細くお暮らしだろう)』となむ(とのように)、ただこの師走のころほひ申す(つい先だっての師走の頃に申していた)、と聞きたまへし(とお聞きしました)」

と聞こゆ(と大内記は申します)。

[第七段　匂宮、薫の噂を聞き知り喜ぶ]

「いとうれしくも聞きつるかな(とても面白い話を聞いたものだ)」と思ほして(と匂宮はお思いになって)、

「たしかにその人とは(その下働きの者たちは大将殿が隠し住まわせていらっしゃるその女を、はっきり誰それとは)、言はずや(言わなかったのか)。かしこにもとよりある尼ぞ(宇治山荘に元から住んでいる尼を)、訪らひたまふと聞きし(大将は御見舞なさると聞いているが)」(と仰ると、大内記は)

「尼は、廊になむ住みはべるなる(尼は渡り廊下の曹司に住んでいるようです)。この人は、今建てられたるになむ(その愛人は、今度建てられた正殿の方に)、きたなげなき女房などもあまたして(こぎれいな女房を大勢仕えさせて)、口惜しからぬけはひにてゐてはべる(優雅に暮らして居ります)」

と聞こゆ(と申します)。

「*をかしきことかな(変な話だな)。何心ありて(どういう心算で)、いかなる人をかは(一体どんな人を)、さて据ゑたまひつらむ(そのように囲っていらっしゃるのだろう)。なほ(あの大将はなにしろ)、いとけしきありて(えらい変わり者で)、なべての人に似ぬ*御心なりや(普通の男とは違う御考えのはずだがな)。　*「をかし」は古語辞典に＜興趣がある。美しい。見事だ。可愛い。愉快だ。面白い。＞などとあるし、また＜滑稽だ＞という語用もあり、現代語で言う＜おかしい＝変だ＞という語感も当初からあったらしい。というのも、「をかし」は通常の平坦な状態とは違った変化に対する嫌悪感以外の、しかし判然としない印象を示す曖昧語のようで、特に意外性が強ければ＜変だ。妙だ。＞くらいの言い方になるのだろう。此処では「かな」と詠嘆助詞があるので、意外性が強い語用だ。また、「かな」は現代語では詠嘆ではなく半疑問を示す

が、古文でも疑問ないし不確かさの語用はあるようだ。 *「みこころ」の「御」は薫大将に対する尊称。「なりや」の「や」は呼び掛けの類の助詞で＜確かそうだったよな＞みたいな確認や同意を求める語感。

右の大臣など(右大臣が)、『この人のあまりに道心に進みて(この人があまりに修道心に進んで)、山寺に、夜さへともすれば泊りたまふなる(山寺に夜でも場合によっては泊り込みなさるのは)、軽々し(身分柄軽率だ)』ともどきたまふと聞きしを(と非難なさると聞いたが)、げに(全くその通りで)、などかさしも仏の道には忍びありくらむ(大将の重責にある者が、どうしてそんなにまで仏道に忍びで通う必要があろうか)。なほ、かの故里に心をとどめたると聞きし(今でも大将は故姉君が居た宇治山荘に未練があると聞いたが)、かかることこそはありけれ(そういうことがあったからだったか)。

*いづら(これは、どうやら)、人よりはまめなるとさかしがる人しも(人よりは真面目だと冷静ぶっている人ほど)、ことに人の思ひいたるまじき*隈ある構へよ(特に誰も思い付かないような隠し事がある態度をするものなんだね)」 *「いづら」は注に＜相手に呼びかける語。＞とある。古語辞典には＜人をうながす時の言葉＞として＜さあさあ。どうした。＞と例示がある。此処では、聞き手への呼び掛けというよりは、自問自答で事実や認識の確認をして、結論で考えをまとめることを示す語用のようだ。 *「くまあるかまへ」は＜陰気な態度＞みたいな語感もありそうだが、意味は＜隠し事がある計略＞だろうか。

とのたまひて(と仰って)、いとをかしと思いたり(匂宮はこれは面白いとお思いになりました)。この人は(この大内記は)、かの殿にいと睦ましく仕うまつる家司の婿になむありければ(大将殿家にとても古くから仕えている家司の婿にあたる人なので)、隠したまふことも聞くなるべし(薫殿が内密にしていらっしゃる事も聞き知っているようです)。

御心の内には(匂宮は御内心では)、「いかにして(どうしたら)、この人を(その隠し姫を)、見し人かとも見定めむ(去年見掛けた女と確かめられるだろうか)。かの君の、さばかりにて据ゑたるは(大将がそのように囲うというのだから)、なべてのよろし人にはあらじ(普通の美人ではないだろう)。*このわたりには(此処の御方は)、いかで疎からぬにかはあらむ(良く事情を知っているらしい)。心を交はして隠したまへりけるも(大将と心を交わして隠していらっしゃったというのも)、いとねたう(全く癪に障る)」おぼゆ(とお思いになります)。 *「このわたり」は注に＜中君をさす。＞とある。「いかで疎からぬ」は＜(事情を)知らない筈はない＞ということだろう。